

延世大学
交換留学報告書

韓国の延世大学で過ごした約4ヶ月は、コロナ禍における渡航でありながらも、大変充実した、日々学びのある留学生活を送ることができたと思う。感染対策によるさまざまな制限があったが、そのような状況下でも、自分のできることを精一杯模索し、最善をつくすことができた。この報告書では、私が韓国で経験したことを、学校生活、課外活動、滞在中に訪れた場所の3つに分けて報告させていただきたい。

まず学校生活について述べてみたい。私が交換留学生として派遣された大学は、韓国の「SKY（スカイ）」と呼ばれる3大名門大学のうちの1つである延世大学（Yonsei University）の未来（原州）キャンパスである。ソウルからは少し離れた閑静な場所に位置し、キャンパス周辺は自然豊かな緑に囲まれていて、勉学に励むのに適したところであった。講義は、韓国語で行われるもの、英語で行われるものどちらも履修したが、現地の学生と同じように受講する講義については、予習復習含め、ついていくのに必死だった。また、履修した講義は全てオンラインで行われた。講義の中で印象に残っているのは、韓国語の会話表現を学ぶ

「ADVANCED KOREAN CONVERSATION」である。受講生は私と同じような交換留学生や正規留学生で構成されており、国際色豊かな講義であった。それに合わせて教授も学生にその国の文化を質問したり、反

対に韓国の文化やしきたりについても教えてくださった。韓国語能力を身につけられるだけでなく、知的好奇心が刺激され、毎週の講義がとても楽しみだった。一種の国際交流の場でもあったと思う。学期末には、試験とは別に自分が関心を持っている社会問題を取り上げ、それを基にしたスクリプトを作り、発表するという課題があった。私は「韓国の若い男性による女性嫌悪と、それに対する女性運動について」というテーマを選択した。説得性を高めるために参考文献として論文を読んだり、堂々とした態度で発表が行えるように練習をしたりと、とても大変で、しっかり発表できるか不安だった。しかし、当日発表したときには、教授からお褒めの言葉と、高い評価をいただくことができ、思わず笑みが溢れてしまうほど嬉しかったし、達成感があったのを覚えている。

次に課外活動についてだが、小針先生からのご紹介で「第7回日韓ジュニアフォーラム」に参加させていただいた。「20,30世代が考える日韓関係の突破口」をテーマに、韓国人学生10人、日本人学生10人の計20人で討論をした。このフォーラムは全て韓国語で進行されたため、討論の流れを理解するのに遅れがあったり、自分の意見を的確に言語化し、皆に伝えられているだろうか、というような不安があり、自身の韓国語の実力不足を改めて痛感した。しかしながら同時に、同世代の学生たち

が日韓問題に真摯に向き合い、よりよい関係を築き上げていくためにはどうしたら良いのか、活発にアイデアを出し合うことで、新たな視点からの考えを聞くことができ、多くの刺激を受けた。日韓関係が悪化しているこの状況下において、それぞれ意見が異なることはあっても、自分たちなりに深く考えているということは参加者全員に共通していて、希望を持つことができた。このような貴重な場に参加することができ、大変光栄であり、機会をくださった小針先生に感謝したい。また、ここで出会った他の学生たちとの縁を、これからも大切にしていきたいと思う。

最後に、韓国滞在中に訪れた場所について述べる。韓国に渡航する前から、ここだけは訪れたい、と思っていた場所があった。それはソウルにある性平等図書館「ヨギ」である。この施設は、韓国のフェミニズム運動の歴史がつまったような場所だ。女性の人権問題を含むジェンダー問題に関連した書籍や資料が多く置いてあり、自由に観覧可能である。また、2016年に韓国で起きた「江南駅殺人事件」の追悼ポストイットが保管されている場所でもある。私は以前から#MeToo運動を始めとする韓国のフェミニズム運動に関心があったため、休日を使って訪ねてみることにした。残念ながら、書籍や資料についてはソウル在住の人に対し

てのみ貸し出しが可能だったため、借りることはできなかったが、職員の方に撮影の許可をいただき、館内の様子だけ撮影した。実際に事件現場に貼られていたポストイットたちに目を通すと、女性ひとりひとりの切実な思いが綴られており、胸が痛んだ。中には男性が書いたと思われるポストイットもいくつかあった。私のような留学生が訪れるのは滅多に無いようで、職員の方から「どうしてこのような所に来たのか」「普段はどんな勉強をしているのか」など、とにかく質問攻めに逢ったが、最終的には「海外から関心を持って来てくれることが嬉しい」「必要なことがあればなんでも言ってほしい」と親切にしてくださった。おそらく2,3時間は居たと思う。館内には書籍の他にもオリジナルファイルやステッカー、マスク、生理用品などが無料配布品として置いてあった。このような場所があることが少し羨ましく思うと共に、韓国のフェミニズム熱を直に感じることができ、行ってよかったと思った。



韓国で過ごした約4ヶ月は本当に一瞬で、夢のようだった。コロナウイルス感染症が流行していなければ経験できたはずの留学生活もあっただろう。しかし、コロナ禍でなければ経験できなかった、平時とは異なる特殊な日々を過ごすことができ、それも自分の成長の糧になったと思う。与えられた環境の中で、自分がどう過ごすのか、何をすべきなのかを考え、行動する力が鍛えられた留学だった。渡航すること自体が厳しいなか、交換留学生として送り出し、受け入れ、サポートしてくださった大学や、家族、友人には、心から感謝の気持ちを述べたい。このような貴重な経験を今後の人生に活かし、社会や人々に貢献できる大人になりたいと思う。